

# 文献センター通信

第7号  
2008年6月30日  
一部 100円

主な内容	1
富士宮交流会のお誘い	2
アナキストブックフェア	3
文献センター自己紹介	4
富士宮だより	5
アナキズムとの出会い	6
『ゲド戦記』のドタバタ	8
運営委員会議事録	6

7月19〜21日の予定で、第4回の富士宮交流会を開催します。

センターの近況は、栃木の黒磯から富士に移り住んで2年余りの間、センターの仕事と精力的に取り組んでくれた山田氏が予定通り、6月末で引き上げます。

同氏の努力の甲斐あって、蔵書の整理と目録づくり作業は大きく進展しました。資料整理についてはどうやら目鼻が就いてきました。もっとも、まだまだ未整理で手つかずの

## 第4回富士宮交流会のお誘い

部分があるのですが、土台づくりは形を成したと言えます。

あとは整理作業のペーデータを完成させて公開すること、従ってその利用方法なども検討する必要があります。そして懸案となっている法人化の課題も浮上しています。

また今年には総会開催の年です。第2回富士宮集会以て承認された規約によれば、3年に1回は総会を開くことになっています。

年度は1月始まりですので遅くとも今年末までに開催されますが、この総会に向けて話し合いもできると期待しています。

皆さんの積極的な参加をお願いします。

日時 7月19日午後4時〜20日午後1時

### プログラム

交流会 19日午後4時〜  
経過報告・承認決議 20日午前10時〜

センター作業 20日午後2時〜  
21日午後1時

会場 ホステル ふもとの家

静岡県富士宮市杉田251

申込み・連絡 Eメール(奥付参照) または電話0904

166410801(佐藤、

交流会の終わるまでは、専用

にします。)

アクセス

1. JR東海道線富士駅北

口からバス(曾比奈行き)で、

新田橋下車。

2. JR身延線富士宮駅か

らバス(曾比奈行き、または

吉原中央駅行き)で、富士脳

研病院前下車。※富士宮駅ま

では、JRのほか、高速バス

も利用可。

3. JR身延線入山瀬駅か

ら、徒歩約25〜35分。

4. 当日は、クルマでの送

迎も可能です。申し込み・連

絡先の携帯電話にて予定を伝

えてください。

## クロアチアのザグレブで アナキスト・ブックフェア

2008年4月11日から13日の3日間、クロアチアの首都ザグレブで第4回アナキスト・ブックフェアが開催される。このブックフェアは2005年3月にザグレブではじめて開催されたもので、以後、毎年この季節に開催されている。

しかし、ザグレブのアナキスト・ブックフェアは継続的なイベントとして拡充していくことになった。毎年、より多くの参加者、出版社、グループを迎え、さまざまなプロジェクトの提供を追求している。

ザグレブのブックフェアは、当初、バルカン・アナキスト・ブックフェアの一環として、地域のアナキスト・グループによって始められた。バルカン・アナキスト・ブックフェアは、もともとは“巡回イベント”として計画されたもので、2003年にスロベニアの首都リュブリャナで第1回バルカン・ブックフェアが開催され、そのあとザグレブ、その他の都市で開催されることになっていた。

アナキスト・ブックフェアは、毎春、ザグレブでの開催を予定し、アナキストやリバタリアン関係の書籍、パンフレットのローカル・リソースとしての役割を担うものである。また、討論の場を提供することも、このブックフェアの目的の一つであり、アナキスト運動やローカル・コミュニティに関するテーマについてのオープンなディスカッションを予定している。

フェアのポジティブな経験にもとづいて企画されたものである。こうしたブックフェアの置かれていく状況はそれぞれ大きく異なっているが、いずれもローカルなレベルにおいても、インターナショナルな意味においても重要なイベントであり、そして貴重な出会いの場であることが実証されている。

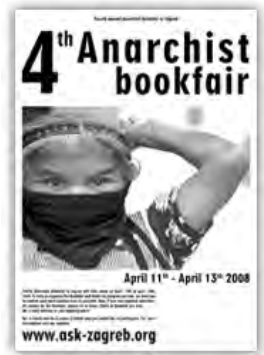
主催者より、このイベントへの参加、サポート、そして連帯を呼びかける！

参加要項：

ブックフェアの運営に参加し、スムーズな進行をサポートしてください。積極的な参加をお待ちしています。すぐにEメールを！

ask-zagreb@net.hr

どんな形の参加を希望されるのか、お知らせください。下記の質問に回答する形で参加希望を伝えてください。その他、自由に書き込んでください。



宿泊の希望がある場合は、詳細を早めにお知らせください。

- 1 サグレブ以外の地域からの参加の方
  - 1 どのような形の参加を希望するのか？
  - 1 プレゼンテーション、ワークショップまたは討論会への参加希望は？
  - 1 宿泊を含めたサポートが必要か（無料宿泊場所は数の制限あり）？
  - 2 ブースを必要とする方
    - 1 どのくらいの大きさのブースが必要か？
    - 1 ブースでのサポートが必要か？
    - 1 ブックフェアの費用をサポートできるか？（ブースを使用すべ

## 文献センター 自己紹介 6

“ばおばぶ”グループは、書庫を建設しながらも一年余りで解散となった。

すでに書庫の建設に前後して、数名のメンバーがグループから離れていた。その主要な原因、意見の相違は、文献センターをどういうものにするか、どのようなセンターを作っていくのかに関するグループ結成以来の問題にあった。文献センターの内容と構想については、さまざまな意見が出され、提案があり、討論されていたが、書庫建設の日程は結論をまたずに進められた。七月段階になると、この現実の進行と、センターの構想の未確定な状況との断絶から、何人かがグループを離れていった。私はそのようにみている。細かいニュアンスは別として、

グループの解散もその延長に位置するのかもしれない。

問題点はどこにあったのか

グループ構成をいま振り返ると、ワークキャンプ（SCI）と、東京自連、そして私と山下康博に分けることができたようだ。まずSCIグループが抜け、東京自連と私たちの間に距離が出来て解散状態となった。

その原因として思い当たるの  
は、次の二点ではないか。一つは、仕事の進め方に対する違いがあった。具体的には、事務的に作業を進めていく私の流儀に対する批判である。その傾向を私は自認しているから、この点については何とも言いようがない。他の一つは、センターをどのようなものにしていくかという構想そのものに関する議論にあったのではない。議論はまたその内容自体と、話し合いの進め方という二面があ

って、後者と実務の進め方において、第一の原因が絡んでいた。

文献センターの構想についてグループ内で話されたことは、まず「単なる図書館は作りたくない」という点にあった。そこで表明された個々人の意図はセンターの枠を押し拡げていくものであった。

● ミニコミを中心とし、グループ相互の交流を図る。

● 情報紙を出していく。

● 各地に同様のセンターをつくり、連合する。

● 外国との交流の場とする。

こうした提案がなされたのであるが、そこには参加したメンバー個々人の意図とセンターの構想との安直な結びつきがあったことは否めない。しかし同時に、そういった関わり方によってやつと動き始めたそれ以前の低迷さも指摘されなければならない。

センターの構想は内容豊富となり、同時にあいま（次頁に続く）

る条件ではない。ブースは無料）

参加者の簡単な紹介を（連絡先、発行している書籍、パンフの概要「リストではなく、簡単な内容紹介」）。

△ 参考資料▽

その他の国、地域のブックフェア  
Bay area バイエリア（アメリカ、サンフランシスコ）

BelFast ベルファスト（イギリス、北アイルランド）

Dublin ダブリン（アイルランド）  
Edmonton（カナダ）

Manchester マンチェスター（イギリス）

Montreal モントルー（スイス）  
New York ニューヨーク（アメリカ）

Norwich ノーリッジ（イギリス）

Saskatoon サスカトウーン（カナダ）

Victoria ビクトリア（カナダ）

いさの中で肥大した。しかし、安易に拡大された構想は現実には直面する過程で制約され、限定されざるを得ない。思うままに、現実には動いてくれない。

この行き方に対し、つまりセンターに結びつけた形で個々の意図

## 富士宮だより

今年も「ふもとの家」の3本の桜はみごとに咲揃いました。「桜の時期はいつもお客さんが少ないのよ」と奥さんが言うように4月5日、土曜日だというのに今年も

満開の桜を観るお客さんはいなかった。そんなこともあってか、龍さんから花見のお誘いが。

それではと作業を中止し、何かつまみでもと思い、近所で土筆を摘み奥さんにキンピラにしてもらう。日差しも柔らかく暖かく、満開の桜の木の下で散り始めたばか

を実現させるのではなく、むしろセンターの機能を明確にし（限定し）、センターの活動に含みなく、センターの活動に含みなく、自立した運動として改めてセンターとの関わり、関係、結合を図るよう方向の転換が必要となった。いわば

りの花びらが舞う中、夕方までの3時間ほど、龍さんの知人を含めて4人でのささやかな花見の宴。桜から視線を移すと富士山の雄姿が現れる。ささやかではあったが、とても贅沢な時間を過ごすことが出来た。

4月の半ば位から庭のあちこちにアマミガサ茸が採れるようになってきた。数年前に奥さんは朝日カルチャースクールで食べられることを知っていたらしい。ただ見た目が奇妙なので食べなかったというのと違ったが、昨年私が食べていることを話したことから食卓に上るようになった。入り口脇の立ち枯

「図書館でいいではないか」といった、ある種の居直りである。

センターはまず図書館の機能を持たなければならぬ。と同時に、それはさまざま外部、周辺の動きとの関連の中で初めて「単なる図書館」以上のもになり得ると

れた木の枝には木耳もみられるようになったが、これはまだ食べていないようだ。駐車場脇のタラの木も大きくなりその収穫量も去年の倍、天麩羅で美味しく頂いたが、この時期お茶の新芽が伸び始め、これも一緒に天麩羅に揚げる。お茶の新芽はすぐに揚がるので目を離せないが、揚げすぎてしまうとほうじ茶のような香ばしい香りが台所に広がり、まあいいか、と納得してしまふ。ゴールデンウィークになるとこの辺りでも茶摘が始まり、新茶の季節となる。

センターで作業をしているとすぐ近くで鶯や雉、ユジユケイなどの野鳥の鳴き声がきかれるようにまだまだ自然が残っている。雨が降ると、大きな蝸牛があちこちに出没、アパートに帰ろうと庭を歩いているとグシャつという音と足の裏に嫌な感触が。今年も一匹踏み潰してしまった。車まで行くとき見慣れない蛙が跳ねていたのでとりあえず写真を撮ってみた。体長5〜6cm、緑色で背中には斑紋がある。後で調べると、モリアオガエルだった。以前はこの辺りにも居たとは聞いたことがあったが、お茶畑ばかりのこの辺りにまだ繁殖できるようなところが何処にあるのだろうか。

(続く)

## アナキズムとの出会い

中学三年の終わり頃から同じクラスの気の合う仲間と酒を飲み始め、その関係は高校に入ってからも続いていた。当然中学生が飲み屋で集まれるわけもなく、最初は友人の部屋だったが、次第に私の家でやるが増えていく。

皆で集まって酒を飲み、音楽を聴き、騒いでいるだけで楽しかった。そんな友人と政治「的」な話を時々するようになるが、まだそれ程意識的なものではなく、なんとなく「反体制」的「的」なだけだったと思う。

大学に入ったばかりの頃、私の部屋で（当時借りていたアパートは池袋駅西口から15分程、山手通りの手前であった）高校の部活で一緒だった友人と二人で飲んでいるうちに何故か成田闘争の話になり、友人は「党派の中では「第四インター」が一番理解できる」と

語っていたが、私はまだはつきりとした思いもなく話を聞いていただけだった。

そんなこともあつて何か関連した本でも読んでみようかと池袋駅西口にあつた高野書店に行つてはみたが、何を讀んでいいのかわからず、ぼんやりと本を眺めているだけ。すると一冊の本をさつきからずつと読んでいる人に気づく。暫くその人の様子を見てみると、読んでいた本を棚に戻し店を出て行つたので、直にその本を手に取り読み出すとこれが面白い。

現代思潮社の大杉栄選集。さつそくそこにあつた無政府主義の哲学Ⅰ・Ⅱ、日本脱出記などを買い部屋に帰ると一気に読んでしまった。それからというものの、アナキズムに関連する本を読み漁るようになり、早稲田の古本屋街まで何度も歩いて通つていた。時には全集を両手で持ち、本を縛っている梱包用の細い紐が重さで手に食い

込み痛くて何度も途中で捨ててしまえと思いつながら。

神田の古本屋街を一日中見て回り、最後にウニタ書店に立ち寄つた時、それまでパラパラと見たことはあつたが、それほど気にしていなかったミニコミ『リベロー』を手に取り、よく読んでみると公開編集会議の日程が載つていた。ちようどその日が会議で、場所も水道橋のすぐ近く。どんな人たちがやっているのだろうかという興味もありその場で電話を掛けて編集



図書室内、日本の文献（この一列のみ）。



CIRAの外観。

入り口。

### スイスCIRA訪問！

今春、スイスのCIRAを訪問しました。次号あたりでの報告を依頼されてます（N）



会議に参加したのが1980年、私が二十歳のとき。それから28年、なんとなく今に至っている。  
（山田崇正）

アーシュラ・K・ルゥグウィン  
の代表作であるファンタジー小説  
『ゲド戦記』を読み、宮崎駿のコ  
ミック&映画『風の谷ナウシカ』  
を観て、そこに表現されているユ  
ートピア的なアイデアを理解

した者であれば、アーシュ  
ラ・K・ルゥグウィンと宮  
崎駿の二人を『アナキズム  
人名辞典』に収録すること  
に異議を唱えたりはしない  
だろう。

二年ほど前に宮崎駿のス  
タジオジブリの制作で映画  
『ゲド戦記』が公開された。  
コミック『風の谷ナウシカ』  
を自ら映画化した宮崎駿は  
二十年以上前から『ゲド戦  
記』の映画化を望んでいた

という。世界でもっとも人気のあ  
るファンタジー小説の一つが、こ  
れまた世界で最高の評価を受ける  
映像作家(ルゥグウィン自身も宮  
崎駿を黒澤明やフェリーと同等に

## 映画『ゲド戦記』のドタバタと 原作者のアナキズム

評価している)によって映画化さ  
れるとなれば、その公開を期待し  
ないわけにはいかない。

しかし、この作品は宮崎駿に  
よって映画化されたのではなく、  
彼の息子、宮崎吾朗の監督・脚  
本によって制作された。この経  
緯については、原作者のアーシ  
ュラ・K・ルゥグウィンが自ら  
のホームページで明らかにして  
いる。いささか長くなるが、そ  
の一部をここに紹介する。

二〇〇五年八月、スタジオ  
ジブリの鈴木敏夫氏が宮崎駿氏  
とともに、私と息子(アースシ  
ーの著作権の信託管理者)と話  
をしにいらつしやいました。そ  
のときの説明によると、駿氏は  
映画製作から引退するつもりで、  
宮崎家とスタジオでは、駿氏の息  
子の吾朗氏にこの作品を作らせた  
いとのことでした。吾朗氏はまだ  
一本の映画も製作したことがな

く、私たちは大いに失望すると  
もに、不安を覚えました。ただし  
プロジェクトはつねに駿氏の承認  
を受けながら進められるという印  
象があり、また実際、先方もその  
ように保証していました。こうし

ようには保証していません。こうし  
た理解のもと、契約は締結されま  
した。△中略▽その後の映画製作  
は猛スピードで進行しました。間  
もなくわかったのは、駿氏が製作  
にまったくタッチしていないとい  
うことでした。駿氏からはとても  
心のこもった手紙が届き、さらに  
吾朗氏からも手紙が来ました。わ

たしでもできる限りのお返事をしま  
した。  
この映画の製作に際して、太  
平洋の両岸で怒りと失望が生じた  
ことは残念に思います。  
後に聞いたところでは、駿氏は  
結局引退はせず、今は別の映画を  
撮っているとか。このことも私の  
失望を大きくしました。早く忘れ  
てしまいたい出来事です

原作者と映画化作品とのトラ  
ブルは別にめずらしいものではな  
く、映画が原作者の意図とはまっ  
たく違った作品になったとして  
も、制作者サイドだけを非難する  
ことはできない。しかしながら、  
今回、この作品に関しては、いささ

か事情が異なるようだ。インター  
ネットのフリー百科事典ウィキペ  
ディアの映画『ゲド戦記』に関す  
る記事でも、スタジオジブリ内の  
ドタバタが詳細に報告されてい  
る。

二〇〇三年頃、『となりのトト  
ロ』などの宮崎作品を気に入った  
ルゥグウィンからジブリへ正式に  
アニメ映画化許可のオファーが来  
た。△監督は宮崎駿に△との要望  
だったが、宮崎駿は△これまで  
の自分の作品で既に『ゲド戦記』  
の要素を取り入れて作ってきたか  
ら、今更できない△、また『ハウ  
ルの動く城を』製作中ということ

もあり、監督を断った。

しかし、何としてもジブリで映画化したかったプロデューサーの鈴木敏夫は、他のアニメスタッフではなく、全くのアニメ素人である息子の宮崎吾朗を監督に起用することを画策した。寝耳に水だった宮崎駿は、アニメーターとしての素養がない素人である吾朗が監督に就くことに、△あいつに監督

ができるわけがないだろう。絵だって描けるはずがないし、もつと言えば、何も分かっていないやつなんだ△と言って猛反対した。そして宮崎駿は吾朗に何度も△お前、本当にやれるのか？△と三日にわたって何度も問いただし、それでも吾朗は監督をやるといい続けた。そしてその後は、息子と全く口を聞かなくなってしまったという

映画『ゲド戦記』の完成試写の際、宮崎駿は途中で席を立ち、

「気持ちで映画を作っちゃいけない」と批判した。二十年來の夢であった『ゲド戦記』の映画化を自らの手で実現することのできなかつた宮崎駿の無念は理解できないこともない。この一連の騒動に対しては、宮崎駿はつぎの自らの映像作品の中で明確な答えを提出していかなければならないだろう。

さて、アーシユラ・K・ルグウインの作品を分析し、原作者のユートピア思想の源流を探った書籍『Utopie, Anarchismus und Science Fiction』がドイツで刊行された。著者はPeter Seyferthで、ミュンヘン大学に提出した博士論文として執筆されたものだ。

著者は一九六二年から二〇〇二年までに発表されたルグウインの作品を紹介する中で、もっともアナキズム的な色彩の強い二つの作品『所有せざる人々』

(一九七四年)と『オールウェイズ・カミングホーム』(一九八五年)のコンテクストを対比し、ルグウインのこの間の思想の変遷を探り出そうとしている。本書の中でルグウインに影響を与えたアナキストとして、老子、クロポトキン、ポール・グッドマン、マレイ・ブクチンなどが挙げられている。発行元はLit Verlag。二〇〇八年刊。(M)

#### 寄贈のお願い

『リベリテール』の合本を作成中ですが、次の3冊を欠いています。お手元に余分がありましたら、センターに寄贈してください。

- ① 135号 (81年6月号)
- ② 167号 (84年3月号)
- ③ 184号 (88年3月号)

なお雑誌形の同誌の最終号は195号と推測しますが、確認情報も寄せてください。

#### 【寄贈書】

久保田一氏より

『藤枝文学舎ニュース』61〜64号(小野庵保蔵私論)17〜20掲載) 戸田三三冬氏より

『両大戦間のイタリア』2007年3月(1920年代のエツリーコ・マラテスタ)

北村信隆氏より

『大阪社会運動顕彰塔・顕彰者事跡録』2007年10月、(財)大阪社会運動協会

磯谷武郎氏より

『アフリカのアナキズム——未来の展望』サム・ムバー&I・E・イガリウェイ(横浜・2008年)



スイスCIRA、1階の図書室内。

## 運営委員会議事録（抄）

からでよいのではないか、という意見に対し、いや、

3月運営委員会 3月22日（土）  
 7月の集会について 19〜21日に開催予定とした。議題は、①去年までの活動報告（十会計報告）②法人化について、とする。（※詳しくは、本紙1面を参照）

通信6号について 発送作業を終了した。

イベントについて 西日本でイベントを実施したい。07年のイベントの素材のリスト（ドゥルティDVD、シネマフェスタの記録）を作成し保存もする。

■全国アナキズムマップ 通信1頁を使って全国の活動に有効なお店などのマップができないか、検討する。（※今号はパス）

■法人化について 法人化した場合、出費や業務量の増加、決算時処理など大丈夫か（維持する力必要）、もっと体力をつけて

所有権の明確化のため、あまり時間がないのではとの意見もあった。

4月運営委員会 4月26日（土）

■山田さんについて 2年がたち、6月末で富士宮を引き払うこととなった。パンフの整理は引き続き行ってもらおう。

■事務所のシェアについて 5月をメドに進行中。

■カレンダーについて 来年版は1枚カレンダーにする。また、合わせて手帳制作も検討、見積もりをとる。

■イベントについて レアものDVD（マフノ、ドウルティ、秋山清、辺見庸さんなど）の上映会をできないか検討する。

5月運営委員会 5月31日（土）

■法人化について 株式会社を検討する。LLCとのメリットデメリットを調査する。

■アナキズムマップ 最初は、新宿編にするか（IRA、模索舎）。身内紹介みたいに終わってしまうのではないかと懸念も。

■年表について（年表部会）  
 まずは、「自由意志」「連帯」「黒の学校」「黒」あたりからスタート。年表から面白いことをピックアップするとか通信に毎号連載していくのはどうか。（※来号からを予定）

### 【訃報】

3月5日に萩原晋太郎さんが亡くなった。半年余り入院をくり返していたが、肺炎をこじらせての永眠。82歳。昨年11月発行の『リベルテール』306号が最終号になった。遠藤斌さん、山口英さんに相次ぐ訃報となった。

### 【メモ】

大阪の社会運動資料センターの存続が危機にあるとの情報が、京都の北村さんから寄せられた。『アナキズム運動人名事典』では随分お世話になったことを思い出す。先年は名古屋の鬼頭文庫も閉鎖された。寂しい限りである。

文献センター  
ホームページ



### アナキズム文献センター通信

第7号

発行／二〇〇八年六月三〇日

発行所／アナキズム文献センター

編集／運営委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1の30の12 三月工房気付

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／

info@cira-japan.net

定価／一部一〇〇円